

幼児は必然的にcuteなのか —1990年代前半の美学者たちの論争—

Are children necessarily Cute?
—A controversy between aestheticians in the early 1990s—

森 功次

大妻女子大学国際センター

Norihide Mori

International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：幼児，子育て，かわいい，かわいさ，美学

Key words : Infant, Child Care, Cute, Cuteness, Aesthetics

抄録

本報告では、1990年代初頭に*British Journal of Aesthetics*誌上で行われた、幼児のcutenessをめぐる論争を紹介する。この論争は、ジョン・モリオールとジョン・T・サンダースとの間で行われた。論争の焦点のひとつは、幼児は必然的にcuteなのか、という点である。本報告では両者の議論を丁寧にとまとめた上で、若干の考察を付す。

序

私は現在「子育ての美学」というテーマに取り組んでいる。子どものかわいさは何によって成立しているのか、それはその他の分野のかわいさや類似的な美的質とどう違うのか、といった問題はこのトピックにおける主問題のひとつだ^{注1}。

子どものかわいさについて美学の観点から取り組んだ研究は少ない。本報告ではその数少ない先行研究の中から、1990年代初頭に*British Journal of Aesthetics*誌上でジョン・モリオールとジョン・T・サンダースとの間に起こったひとつの論争を紹介したい^{注2}。

この論争は3つの論考から成る。まずモリオールが1991年に“Cuteness”という論文を発表する^[1]。それに対し、サンダースが1992年に批判論文を発表^[2]、さらにそれへの応答としてモリオールが1993年に応答論文を発表した^[3]。

以下では、各論文の内容を丁寧に紹介し——とりわけモリオールの論考はcutenessに対する繊細な着眼点がすばらしいので、その指摘を丁寧に（ほぼ全訳に近い形で）紹介する意義がある——、その後、それぞれの意見に対して若干の私見を述べる。なお、本報告では論争内で語られている

cuteness, cute の語は和訳せずにそのまま用いる。というのも、本報告末尾で述べるように、この語が指す概念は日本語の「かわいい」「愛らしさ」とは若干異なる概念だと私は考えているからだ。

1. モリオールの論文，“Cuteness”(1991)

モリオールはまずcutenessという美的カテゴリーが美や崇高と比べると伝統的に脇に追いやられてきた事実を指摘する。この事実は、cutenessという美的カテゴリーがあまり重要でないことを示唆するが、なんとモリオールは、伝統的な芸術・美学に関する限り、この軽視が正当であることを認める。モリオールは本論文で、cutenessを二次的な美的カテゴリーとすることは正当なことだと主張するのである。というのも、モリオールによれば、cutenessは進化論的にわたしたち人間の中に組み込まれている美的カテゴリーでしかないからだ。

モリオールの論文は4つの節から成っている。第1節では、cuteなものへの反応が情動論的・行動学的観点から分析される。第2節では、この反応がヒトという種にとって生存価(survival value)をもつと主張される。第3節では、cutenessへの感受性が、赤子だけを対象とするものではなく、動

物・大人・非生物へと拡張しうるものであることが指摘される。第4節では、なぜ *cuteness* が重要な美的カテゴリーではないのかが説明される。論文の構成は以下のとおり。

- 第1節 *Cuteness* はどのようなものか
- 第2節 *Cuteness* の生存価
- 第3節 赤子以外の *cuteness*
- 第4節 美的カテゴリーとしての *cuteness*

以下、それぞれの議論内容を丁寧に追っていきこう。

第1節 *cuteness* はどのようなものか

第1節では、この論文で考察される *cuteness* がどのようなものかが説明される。*Cute* だと言われるものには、例えば赤子、子犬、コアラ、クマ、一部の大人、そしてコテージ、村落、車などがある。これらの例を挙げた上で、モリオールは *cuteness* とは第一義的にはモノや行為の視覚的部分についてのカテゴリーなのだと言う（場合によっては声やメロディが *cute* だと言われることもあるが）。*Cute* な肌触り、味、匂いといったものはない、というのがモリオールの立場である。*Cuteness* 概念の適用領域がこのように限定されていることは、注目に値する。というのも、この点からは、モリオールが考える *cuteness* が日本語で言う「かわいさ」「愛らしさ」とは若干異なるものであることが示唆されているからだ。

モリオールは *cute* という語は基本的に、ヒトの赤子・幼児に適用されるものだと考えている。コアラや犬、大人、非生物などに適用される *cuteness* はその派生でしかない。それらは何らかの点でヒトの赤子に似ているから *cute* なのだ、というわけだ。

モリオールはここで、「哺乳類の進化において、幼児の特別さを認識し、鑑賞することは種の生存に役立つ」という仮説を提示する。そのような幼児性を示す特徴が *cuteness* を構成する、というわけだ。どの哺乳類でも、幼少期には大人に魅力を感じてもらい、世話をしてもらい必要性がある。とりわけヒトの赤子は哺乳類の中でもきわめて無力な存在であるため、養育の必要性が圧倒的に大きい。そのため、ヒトは、子どもを特別に高く評価するようになっていく、とモリオールは言う。

子どもであることを示す特徴には、まず小ささ

(*smallness*) が挙げられるだろう。だが、*cuteness* は単に小さいことではない。子どものカニは大人のカニと比べて小さいが *cute* なわけではない。ただ小型化するだけでは *cute* にはならないのだ。美術の歴史において、幼児はしばしば小型化した大人のようなものとして描かれてきたが、そのような描写は *cute* ではない。赤子は、ただ小さいだけではなく、ある重要な違いを示すから *cute* なのだ。

モリオールはここで動物行動学者コンラート・ローレンツのベビーシマに言及する。ローレンツが挙げる特徴は以下のようなものだ。

「顔と比べて額が大きく張り出し、その下に大きな目がついている顔は、可愛らしい（《愛らしい》）という感じを与える。同じ効果を与える身体の特徴として、比較的短く太った手足、柔らかくて弾力のある皮膚、そして最後に頼りなく不器用という行動特徴がある」^{注3}

Cute な特徴とは、大人のうちに〈その子を抱え、抱きしめ、世話したい〉という反応を引き起こす傾向性をもっている特徴である。動物行動学の用語でいえば、これはやさしい気持ちと愛情ある行動を引き起こす「解発刺激 (*releasing stimuli*)」であり、民間心理学の用語でいえば、これは「親子間の絆」を発生させるものなのである。

Cute な赤子を抱きたい、触りたいという生得的傾向は、*cute* と *cuddly* (抱きしめたい) の二つの語の間にある用語的つながり (*Collocation*) にも示されている。わたしたちはまた、赤子に対して *sweet* という語を使ったり、「食べちゃいたい！」と言ったりするし、実際に食べるふりをしたりもする。

赤子への愛の快楽はしばしば、それとは別種の快楽、とりわけユーモアの快によって強化される。モリオールはここで、*cute* とユーモアとの結びつきはユーモアについての支配的理論である不一致説 (*incongruity theory*) の観点から理解できる、と述べている。赤子の様々な特徴は、わたしたちが大人に適用する基準とは一致していないものだからだ。

第2節 *Cuteness* の生存価

赤子は世界中で *cute* なものとして見られている。偏屈な者たちでも、敵対するグループの赤子にすら *cuteness* をしばしば見出すし、抱きしめたくな

ることを認めるだろう。この *cuteness* への普遍的反応は、進化論の観点から説明できる、とモリオールは言う。大人の側に赤子を抱きしめたいという欲求が生まれることで、赤子が保護され食事を与えられる可能性は高まるだろう。大人側のこの感情は、赤子側にある触覚的刺激への欲求（つまり、触ってほしいという欲求）を満たすものでもある。だが残念なことに、この触覚的刺激への欲求は、20世紀になるまで生物学者や物理学者には認識されていなかった。1900年代の養護施設では、赤子に触覚的刺激をほとんど、もしくはまったく与えていなかったため、食事や医療的な世話を十分に与えていても、しばしば致死率は高いままになっていた（赤子をしっかり撫でるようにになると、致死率は改善されるようになった）。

モリオールは *cuteness* の生存上の利点をさらに紹介していく。赤子は自分の世話を何もできないので、子育てにおいては親側に過度な負担をかけることになる。赤子には絶えず注意を払っていかねばならない。親や年上の子どもにとって、それは大変なことだ。赤子の *cuteness* は、親側にとって、その労苦を埋める補償となる。赤子は深夜に泣きわめいたり、食器を放り投げたりと、さまざまな仕方で親を困らせるが、その見かけの *cuteness* は、赤子の無力・無垢なさま、そして自分の行動の意味を何らわかっていない様子とあいまって、親の心労を和らげるのである。赤子は、Cuteなものとして見られるために、微笑む必要すらない。赤子はどんな表情でも——ときには泣いているときすらも——cuteなものとして見られる。赤子の *cuteness* には、親側を忍耐強くさせる効果がある。赤子に言語などのスキルを教えることには時間がかかるが、*cuteness* の効果によって、大人側は喜んでその時間を費やそう思うようにしむけられる。きちんと書けていなビジネスレターなどで大人の言葉遣いの不備を訂正するときにはイライラしてしまうものだが、赤子としゃべることはむしろ喜ばしい経験になる。

大人にとって、赤子に *cuteness* を見出すことの利益は、この喜び以外にもある。おそらく最も重要なのは、それが大人自身の愛情欲求を満たすからだ。愛情を十分に受けずに育った人は自己肯定感が低い傾向にある、と指摘する研究もある。こうした愛着欲求は犬や猫を飼うというふるまいを説明するものでもある。ペットの重要な意義は、

触ったり撫でたりする対象となることなのだ。

このように、*cuteness* は大人による子どもの世話を促進し、かつ、大人や若者の触覚的欲求を満たす振る舞いを引き起こすので、*cuteness* は生存価値（*survival value*）をもつ。子供が無力で、かつ、大人に世話をするよう促す *cuteness* のような解発刺激のない種は、生存競争においてきわめて不利になるだろう。自分で餌を取る能力を備えて生まれてくる昆虫のような種であれば、生まれてすぐの時期にケアを必要としないので、*cuteness* なしでもやっていける。だが哺乳類にとって、とりわけヒトにとっては、*cuteness* は不可欠であるように思われる。以上が、モリオールの指摘する *cuteness* の生存価値である。

第3節 赤子以外の *cuteness*

モリオールはこの節で、*cuteness* が赤子以外の領域にも拡張される質であることを指摘していく。ヒトという種に赤子の *cuteness* に反応する傾向性が組み込まれているのであれば、赤子を *cute* にするような特徴をもつ他のものにも同様に反応する傾向があると考えるのは、当然のことだ。他の動物、とりわけ私たちがペットとして飼うような動物の子どもは、その最たるケースだ。多くの動物では、大人と子どもとの間に、人間の大人と赤子の間にあるような関係が見られるし、パンダやコアラのような、大人になっても人間の幼児に見られるような特徴をもつ種もある（モリオールはここで、ウサギ、イヌ、ヒトの大人と子供を比較するイラストを載せている）。こうした動物に見出される *cuteness* はさまざまな形で商品化されている。その最たるものはテディ・ベアだ。実際「テディ・ベア」という名前の由来は、まさに *cuteness* が生存価値をもつことを示している（アメリカ大統領セオドア（テディ）・ルーズベルトが、狩りの最中に会った子熊を殺さなかった、という逸話がある）。

おもちゃ産業やイラスト産業は、「超正常（*supernormal*）」な表象を用いることで、*cuteness* を売り出している。例えば、子犬や子猫の頭・目を過剰に大きく描くことで、*cuteness* をアピールするのだ。そうした例は、おもちゃや絵本、グリーティングカードなどの中に数多く見出すことができる。

赤子以外に *cuteness* が拡張される第二の例として、次にモリオールは人間の若者・大人のケースを挙げる。男子や男性は女子・女性のことを“*cute*”

だと言うし、例数としては少ないが、女性側が男性側をそう呼ぶこともある。モリオールはこうした用語法は、ロマンチック・ラブの感情と赤子に抱く感情との間にある類似性に依拠しているのだと示唆している。実際、恋人に赤子のような特徴を見出したり、恋人を赤子のようにあつかったりすることは、よくあるのだ。恋人にペットのような名前をつけたり、赤子に話しかけるような話し方で恋人と話すこともある。恋人のことを「ベイビー」と呼ぶのもよくあることだ。さらには恋人に食べ物のようなあだ名をつける者もいるが、こうしたつながりは *cuteness* と食事との間にあるつながりを示唆するものでもある。

こうした恋人の幼児化・赤子化は主に男性側から女性側に対してなされるものであるし、しばしばそれは性差別的なものであるが、こうしたところで見出されている魅力が、大きな目や不器用さといった赤子的特徴に似ているものであることは疑いない。そしてこうした場面での恋人の *cuteness* は、赤子のときと同様、相手を抱きしめたい、世話したい、という欲求を引き起こす。結局のところ、性的刺激や性交を除けば、大人に対する愛情のかなりの部分は、赤子に対する愛情とよく似ているのである。キスしたり、鼻を押し付けたり、食べるふりをしたり、抱きしめたり、揺さぶったりといった愛情表現は、大人に対するのと赤子に対するとの間にあまり違いはない。

先に述べられた *cuteness* と可笑しみとの類似は、恋人の *cuteness* にも見いだせる。わたしたちは恋人の不器用さやナイーブさを *cute* なものとして見る。恋人の魅力についての多くの研究が示しているように、恋人の弱々しさは魅力のひとつになりうるのである。

“Cute”という語の使用範囲を、人間や動物からコテージや村落や車のような非生物へと拡張するのは、さらに大きな飛躍となる。コテージを抱きしめたいと思うことはまずないし、車に頬ずりをしたいと思うことも、よほどの広告的誇張表現でないかぎりにはふつうはないだろう。しかしながらこれらの *cute* な非生物と *cute* な赤子との間に共通点がないわけではない。第一に、*cute* なコテージや村落は、その種の中では比較的小さい。大きな村落は *cute* ではありえないし、ベッドルームが5つもある家も *cute* であるはずがない（個々の部屋は *cute* になりうるが）。小ささだけでなく、脅威の

なさや無垢さも共通項となる。尖ったウィングやオーバーサイズのエンジンを備えた車は *cute* ではない。そのようなアグレッシブな様子は *cute* の対極にあるものだ。*Cute* なコテージや車は通常よく手入れされている——荒廃したコテージや汚れた車は *cute* ではない。それは飢えている子どもが *cute* ではないのと同じだ。

こうした非生物のものを *cute* と呼ぶとき、わたしたちは赤子に見出す *cute* の図式（小さい／温和／無垢）を拡張している。この説明が十全なものであるかは定かではないが、この図式がある種の役割を果たしていることについては確信している、とモリオールは言う。

第4節 美的カテゴリーとしての *Cuteness*

最後にモリオールは論文冒頭で触れた事実——*cuteness* が芸術や美学において重要なカテゴリーではなかったこと——について考察する。まずモリオールは、このようになっている理由の一つは政治的なものと指摘する。西洋美術の伝統は男性中心的なものであり、男性は *cute* に含まれる優しい感情を芸術の重要な要素として評価してこなかった。聖母という主題はあったが、子育ては西洋美術の主要テーマにはならなかったし、男性芸術家や男性美学者たちは、子育て的行為を引き起こす美的な特徴を重要なものとしては考察してこなかった。

Cuteness が西洋美術の伝統において重要なものとはならなかった第二の理由は、それが精妙さを欠く、大雑把な性質だからだ。結局それは、劣った美的性質として扱われてきたのである。モリオールによれば、*cuteness* はわたしたちが容易に見出し、それに対して自動的に反応するように生得的にできているような特徴である。*Cuteness* はそれを見分けるためにいかなる趣味も必要ないし、美的教育も必要ない。これは *cuteness* とキッシュとの間に多くの共通点がある理由でもある。進化論的観点から言えば、*cuteness* が種にとっての生存価をもつためには、このように *cute* が見出しやすいものになっていなければならないことは明らかだ。少数の人にしか見分けられなかったり、複数の解釈を許容したりする精妙な特徴は、定義上、成人たち一般に画一的な影響をもたらすことはない。しかし *cuteness* はそのような影響をもたらさなければならない。もし、飢えた子供が食事を与えても

らうために唯美主義の親を必要するのだとしたら、わたしたちの種は始まることすらなかっただろう。

Cuteness は美学や芸術批評においてあまり言及されることがなかったし、言及されるときもほとんどの場合は否定的に考えられてきた。芸術作品を cute と判断することは、ふつうはそれをシリアスには受け止めないことなのである。ここでモリオールは、諸芸術における cuteness への批判の中心的なものは、感傷性 (sentimentality) に対するものだと指摘している。ここでいう感傷性とは、作品の主たる効果が、単純で薄っぺらい感情にあからさまに依拠していることを意味する。たとえば 19 世紀のメロドラマや 20 世紀の映画では、悪者に酷使される無垢なキャラクターが皮相的に提示されるが、そうした表現は感傷的なものだ。問題は、哀れみの感情が喚起されることではない——それは悲劇であれば当然やっていることである。問題は、その感情喚起のありかたが大雑把で薄っぺらいことなのだ。感傷的な映画の一場で、鑑賞者は、作者の意図通りに泣いている自分に気づいたとき、監督にあからさまに操られているように感じて恥ずかしく思う。人は、ドラマによって魅惑されたいのであって、心を強奪されたいわけではない。つまり人は、自由な人として反応したいのであって、身体に組み込まれている仕組みのままに反応したいわけではないのだ。だが、安易な「哀れみ解発因 (pity-releaser)」——たとえば完全な悪役によって悪く扱われる完全に無垢のキャラクター——を発見した監督は、それをあからさま形で提示し、その結果人々は、監督の思惑通りに泣いてしまう。偉大な悲劇によって引き起こされる哀れみとは違って、メロドラマによって引き起こされる哀れみは、より大きな感情を伴っていないし、キャラクターについての洞察も、人間的状況についての新たな観点ももたらしてはくれない。感傷的な感情は、短く、安易で、思慮の浅い感情なのだ。

クライブ・ベルは実人生に関連した感情を提示する芸術を全体的に拒否し、真の芸術は美的感情のみを喚起すべきだ、と考えていたが、その理由の 1 つは、彼が造形美術における感傷性を否定的に捉えていたからだ。ベルの考え方は極端だと批判されるべきだが、もしその考え方の裏に感傷性への批判を見て取るならば、その立場も理解できなくはない。

Cuteness は、優しい感情を自動的に引き起こすので、メロドラマにおける哀れなものと同じように、芸術において批判されるべきものとなる。たしかに cute なものに感情を感じることができることは嬉しいことなのだが、それは苦しんでいる者に憐れみを感じることができるのが嬉しいのと同じなのである。たしかにどちらの経験も、喜ばしいことではある。だが芸術経験には、こうした単純で自動的な感情以上のものを、すなわち、より複雑で、相反する感情が混合するような感情を求めたくなる。そして人は芸術に対してより深い理解と結びついている感情を、そしてその感情が芸術経験の中で発展し進化し、さらには解決 (resolve) することすらも望む。自動的な反応ができることは人間にとって幸運なことだったが、そうした反応は偉大な芸術の素材には決してなり得ないのである。

以上がモリオールの議論である。これに対して、翌年の 1992 年、サンダース (Jhon T. Sanders) が同誌で批判的論文 “On ‘Cuteness’” を発表した。続いて、サンダースの議論を見ていこう。

2. サンダースによる批判論文, “On ‘Cuteness’” (1992).

サンダースがまず取り上げるのは、cuteness と進化上の利点との関係についてである。

サンダースは、モリオールの議論から以下の 4 つの主張を抜き出す。「モリオールにとって cuteness は(1). (普遍的ではないかもしれないが) 現在人間の赤子に共通の特徴集合であるが、(2). 我々の哺乳類の祖先の幼児は、かつてその特徴を欠いていた、そして(3).それが祖先の種の成体にとって魅力的な特徴だったのは、幼児がその特徴をもっているという事実とは独立のことであり、(4). その特徴は、その魅力のおかげで進化の過程で残り続けた。」このまとめにしたがうならば、cuteness は、成体に幼児をケアしたいと思わせる、幼児の抽象的一般的性質だということになる。

Cuteness をこのように説明するのは、完全に間違いではないとしてもミスリーディングだ、とサンダースは言う。というのも、ここからは以下の 3 つの帰結が容易に出てきてしまうからだ。a) 幼児一般は、もしかしたら cuteness を発達させることがなかったかもしれない。b) もしそうになっていた

ら、幼児はその欠陥のせいで、両親から十分にケアされなかっただろう。さらに、c) *cuteness* といま呼ばれている一般の抽象的特徴を、たとえば蜘蛛の子どもがたまたまもち、かつ人間の子供がそれを持たなかったとしたら、人間の親は自分たちの赤子よりも蜘蛛の子をケアしたくなることになってしまう。こうした奇妙な帰結を避けるためには、*cuteness* についての考え方を改めなければならない。

もちろん大人が、*cute* でない子よりも *cute* な子により注目することはありうる。しかしそれは *cute* でない子が大人の期待から何かしらの形で逸れているからではない。そうした子たちは悲しいかな普通ではない (*unusual*) のだ。ここでサンダースは次のような議論を組み立てる。すべての子供が原理的に *unusual* であるというのは論理的にありえない。しかしまさにそれと同じ理由で、すべての子供が原理的に *uncute* であるというのも、ありえないだろう。というのも、*cuteness* はただ、幼児っぽい外見をもつことの属性 (*attribute*) ではないからだ (幼児が似ていることの内実がどのようなものであっても)。そして幼児に気を配り、世話をするという私たちの先天的素因 (*antecedent predisposition*) が、幼児に似ているあらゆるものへと波及するのである。この点は、モリオールの議論と齟齬をきたす。というのも、モリオールの議論では幼児は、種の大人を魅惑し喜ばせるという独立の能力のおかげで、特定の外見を「獲得する」とされていたからだ。

サンダースはここから、*cuteness* の出どころについて考察を進めていく。サンダースによれば、人間の *cuteness* が(1)で述べられているような特徴 (現在人間の赤子に共通の特徴集合) のうちに見出されるものであることは疑いないが、その一方で、その特定の特徴と *cuteness* とのつながりは何ら本質的なものではない。つまり、いかなる特徴集合も内在的に *cute* であることはない。むしろ *cuteness* は単に、赤子に典型的なあらゆる特徴なのだ、とサンダースは言う (つまりここでサンダースは *cuteness* を、特定の特徴が内在的にもつものとしてではなく、「赤子が典型的に持つ」という関係によって規定する方向に話を進めているわけだ)。サンダースは次のように言う。もし仮に人間の赤子が皆 (もしくはほとんどが) 6つの耳を持っていて、そのうち4つの耳は7歳のときに脱落す

るのだったら、わたしたちは6つの耳を *cute* だと思っていただろう。現在のかわいい幼児の特徴は、私たちの進化の過程のどこかでは一般的でなかった特徴であるだろうが、だからといって、当時の幼児たちが *cute* でなかったわけではない (もっとも、だからといって、私たちの単細胞の祖先が新しく分裂したときにかわかったことになるわけでもないが)。もし当時の幼児らが親からの継続的なケアを必要とする存在だったのであれば、当時の大人たちは皆、今の私たちと同じくその幼児に惹かれていたのだ。

よって、いま私たちの中で *cute* と言われている特徴が先祖の子に備わっていなかったとしても、そこから、先祖の子どもたちには親を魅惑する決定的な能力が欠けていたということにはならない。さらにサンダースは、子どもへの注意が子育てにとって重要なものであるとき、その祖先が *cuteness* を欠くことは不可能だとすら言う。その世代の子どもたちは別の特徴を持っていた (つまり(1)で言われる特徴を欠いていた) のだが、それでもその子どもたちは *cute* だった。つまりその子どもたちは親を魅惑していた。よって、*cuteness* についての(2)のような記述には曖昧なところがある。哺乳類の祖先は、現代の子どもたちを現代人類の中で *cute* にしている特徴を欠いていたかもしれないが、それでも親を魅惑する特徴はもっていたはず——つまり、その子たちは親からしたら *cute* であったはずだ。

以上から出てくる結論は、(3) (*cuteness* を構成する特徴が先祖の種の成体にとって魅力的な特徴だったのは、幼児がその特徴をもっているという事実とは独立のことだ) のように *cute* を特徴づけることはまったくもってもらしくない、ということだ。両親が子どもをケアするのは、その子どもたちが何らかの独立の基準にもとづいて魅力的だからではない。むしろ魅力の基準の大部分は、その子たちが偶然持つことになった見かけに依存している。だがもしこれが正しいなら、(4)のような説明 (〈その特徴は、その魅力のおかげで進化の過程で残り続けた〉) は、現代の子供たちがいかにして今のような外見を獲得してきたのかについての、あまりもってもらしくない説明となる。というのも、現代の子どもたちは祖先の社会では魅力的ではないはずだからだ。その子たちはその社会では現代の *cute* ではない子たちと同じような扱いをさ

れるだろう（おそらくそうした子たちは、進化の中では多少不利になったはずである）。サンダースは、cute と結びつけられる特徴を現代の子らが典型的にもっていることの真の理由は、別のところに見出されるべきだと言う。たとえば、体と比べて頭が比較的大きいことは、生物の身体的発達の生物学的戦略のような事実と結びつけられるべきなのだ。

サンダースはこれらの批判は些末な批判ではないと強調している。というのもサンダースの考えでは、赤子と大人を何らかの形でつなぐ、cuteness と呼ばれる質——これが大人たちに子どもへの優しい気持ちを生むわけだが——を探するというアプローチは、ありがちな過ちだからだ。親は赤子を魅力的・かわいいと思う傾向にある、という点を疑問視することがここでの目的ではない。この傾向はある程度、生まれつき組み込まれている (hard-wired) ものだ。しかしこれは、大人が赤子にポジティブに傾向付けられていることを表す、ひとつの表現にすぎない（もっともこれは赤子の特筆すべき特徴への特別な仕方での言及にはなっているが）。Cuteness は赤子を前にした人を心から喜ばせることと同じく、存在的地位 (ontic status) ではない。

この要点は何か。サンダースの理解からすれば、モリオールは cuteness を、向かい合わせの親指 (拇指対向性) と同じ類の特徴であるかのように、つまり、もしかしたらヒトが持ち得なかった特徴であるかのように語っている。それがなければ、ヒトは今のようすばらしい生物には育たなかっただろう、というわけだ。たしかにヒトは、もしかしたら別の特徴を持っていたかもしれない。だがサンダースの考えでは、それでも cuteness がなかったことはありえない。もし進化の過程で cuteness がなかったら、私たちの種は絶滅していただろう。もし cuteness がモリオールが考えるような役割を果たす特徴だったら、それがなくともやっていけるのは、進化の過程でいえば比較的遅くの話だろう。つまり、かわいくない子でも世話されるようになった時期の話だ。

おそらく、ヒトやサルは、赤子っぽい見かけの生物を好意的にあつかうように常に傾向づけられている——その典型的な外見がどのようなものであったとしても、そのような傾向性がなかったら、赤子の養育は成り立たないはずだ。

結局サンダースによれば、cuteness それ自体が進化的価値をもつことはありえない。なぜなら、祖先の子どもたちが uncuteness であることはそもそもありえなかったからだ。これは幼児が cuteness をもっていなかった種は滅びていっただろう、ということではなく、親の子を養育する必要があるあらゆる生物においては、典型的な赤子はその種にとって必ず cute だということだ。

以上がサンダースからの反論である。これに対してモリオールは翌年、再応答の論文を提出した。次節ではその応答の議論を追っていきこう。

3. モリオールからの応答論文, “The Contingency of Cuteness: A Reply to Sanders” (1993).

サンダースはモリオールの論文から 4 つのテーゼを引き出し、それらすべてに反論していた。くり返すとその 4 つのテーゼとは、Cuteness は(1)人間の子どもの中に共通して見られる特徴の集合である。(2)哺乳類の祖先の子どもがかつて欠いていた一連の特徴である。(3)子どもがその特徴をもっているという事実から独立に、大人たちを魅惑する特徴である。(4)その魅力のおかげで種が特別に選別される特徴である——というものである。サンダースは、この 4 つのテーゼ全てに反論していたわけだ。

だがモリオールが言うには、(3)、(4)はモリオール自身の主張ではない。初期の哺乳類は、大きな頭や不器用なふるまいを——それが子どもの典型的な特徴になる以前は——魅力的だとは思っていなかっただろうという点については、モリオールとサンダースの意見は一致しているのである。ただし、サンダースがモリオールに帰している「幼児はしかじかの見かけを、その種の大人を魅惑し楽しませる独立の能力のおかげで獲得した」という意見は、モリオールは自分のものではないと言う。モリオールによれば、最初の論文で自分が言わんとしていたのは、進化のある段階で若い哺乳類はとりわけ赤子っぽい特徴を発展させたのであり、それが大人側に愛情的ふるまいを引き起こす「解発刺激」として作用した、ということだ。これらの特徴は生存価値をもち、次世代へと受け継がれた。そして、昆虫やトカゲのような初期の生物——これらの子どもは親からのケアを必要としない

——は、こうした特徴を発展させなかった。これがモリオールの意見である。

モリオールはここから、サンダースによる(1)、(2)への批判に対して、さらに応答していく。モリオールによれば、先の論文では(1)、つまり、今日の *cuteness* はとりわけ視覚的な特徴の集合になっている、ということ述べていたが、モリオールはこれをサンダースが言うような必然的真理だと主張していなかった。つまりモリオールはこれを、偶然的な真理だと考えるのである。

モリオールはサンダースの次の記述には賛同する。「人間の *cuteness* が(1)で述べたような特徴のうちに見出されるのが疑いない一方で、その特定の特徴と *cuteness* との間に必然的つながりはない。むしろ *cuteness* は単に、赤子に典型的なすべての特徴なのだ」(p.163)。哺乳類は別様に進化することもありえた。子どもの何らかの別の特徴がとりわけ赤子っぽい特徴になっていたかもしれない。別の惑星のある種にとっては、鮮やかな緑色の外骨格や平べったいゼラチン状の触手が *cuteness* を構成してるかもしれない。モリオールは、*cuteness* にサンダースが言っているような存在論的地位を与えようとはしていなかった。モリオールにとっても *cuteness* は、何かしらの生物学的な仕事——つまり子どもを養育すること——をさせるための視覚的特徴なのである（つまりモリオールもサンダースのように、*Cuteness* を関係的・機能的な点から規定する立場に立つ、ということだろう）。

この説明によって、(2)についてのモリオールの立場もよりクリアになる。サンダースは〈今日の私たちが *cute* とは呼ばないような特徴が、進化の初期段階では親に子どもを *cute* だと思わせる特徴になっていたかもしれない〉と指摘し——モリオールもこの指摘が正しいことは認める——この事実からサンダースは(2)、つまり〈*Cuteness* は私たちの哺乳類の祖先の幼児がかつて欠いていた、特定の一連の特徴だ〉というテーゼを疑問視しようとしていた。しかしモリオールによれば、サンダースが(2)を引き出してきた箇所モリオールが主張していたのは、たんに〈親による子どもの養育が重要になる進化のある段階で、ある視覚的な特徴が親にとって子どもを *cute* なものにさせたのであり、それ以前の時期は *cute* な特徴などなかった〉ということではない。たとえば無脊椎動物の頃の祖先は、*cuteness* を必要としていなかった。

モリオールが論文全体をつうじて焦点を当てていたのは今日の人間の赤子のうちに *cuteness* を構成している特徴であるが、とはいえモリオールは進化の初期段階で別の特徴が *cuteness* を構成していたかもしれないことを否定しはしないのである。

(1)、(2)に対するサンダースの反論の要点は、現代の人間の赤子のうちに *cuteness* を構成する特定の諸特徴と *cuteness* との結びつきは偶然的な関係でしかない、ということだった。しかしその点にはモリオール自身もそもそも同意しているので、モリオールからすれば、サンダースの反論は見間違い (*misplaced*) と言わざるをえない。

このように合意できる点を確認したあとで、次にモリオールはサンダースの主張に対する批判へと移る。サンダースは、赤子は *cute* でなければならない、と主張している。サンダースはモリオールに対してこう批判していた。「モリオールの推論から、一般的な幼児は *cuteness* を発達させることはなかったかもしれない、と推論するのはあまりにも簡単だ。」実際、これはモリオール自身の主張であった。そしてその主張に対して、サンダースは〈子どもは必然的に *cute* なのだ〉と主張するわけだ。これに対してモリオールは次のように反論を組み立てていく。モリオールによれば、サンダースが論じている必然性とは、ときに「論理的」のように聞こえるし、ときに「生物学的」のように聞こえる。論理的推論について語る中でサンダースは、赤子は定義上 *cute* だ、と述べていた。「子どもが一般的ルールとして *unusual* であることは、論理的にありえない。だが同じ理由で、子どもが一般的ルールとして *uncute* であることも論理的にありえない。*Cuteness* とは端的に、子どものような外見の属性なのである（その子どものような見かけがどのようなものであれ）」(pp.162-3)。さらに論文の最後でサンダースは、「子どもの典型的特徴がどのようなものであれ——親が赤子を献身的に養育しなければならない種においては——その特徴はその種にとっての *cuteness* の決定要因である」とも言っている。だがモリオールによれば、子どもが一般的に持つ特徴と *cuteness* とを単純に同一視することは間違いだ。たとえば、左右対称性や拇指対向性は、別に *cute* ではない。さらにいえば、とりわけ子供っぽい特徴ですら、そのすべてが *cute* であるわけではない——注意喚起なしにいきなり嘔吐する、といった特徴は *uncute* な特徴だろ

う。赤子っぽい特徴のすべてが *cute* になるわけではない。むしろ *cute* な特徴とは、とりわけ赤子っぽい特徴の中でも、大人のうちに養育的ふるまいを引き起こすような特徴なのだ。

サンダースは〈赤子は必然的に *cute* だ〉という生物学的論証も提出していた。それによれば、赤子の時期に大量のケアを必要とする動物は、「赤子っぽい生物に常に肯定的に傾向づけられていなければならない」。もしそのような傾向性がなかったら、子育ては成り立たない、というのがサンダースの主張だった。しかし、モリオールによれば、*cuteness* を生物学的に必然的なものとみなすこのような見方は、親が子育てへと動機づけられている、もしくは動機づけられていたかもしれない別のルートを見逃している。*Cuteness* は、視覚的魅力とは別のところから来るかもしれないのだ。養育的ふるまいへの解発刺激は、聴覚や嗅覚から来ることもある。今日の多くの種は、特別な声や匂いによって親を子育てに駆り立てている。モグラの子育てにおいては、視覚的な刺激は実質的に何の役にも立っていない。さらにいえば、子育ては子どもの外見、音、匂いから独立に動機づけられることもある。人の母親は下垂体から出るオシキトシンホルモンによっても子育てに駆り立てられる。子どもに親を駆り立てる赤子的外見が欠けている場合であっても、血中の適切なホルモンをもつ親によって子育てはなされていたかもしれない。

以上の考察を経て、モリオールは以下のように結論づける。*Cuteness* はパワフルなメカニズムであるが、赤子が *cute* だというのは論理的・生物学的必然性ではない、と。

4. 考察

以上、論争の経緯をまとめてきた。以下では若干の考察・コメントを記しておきたい。

A. まず、二人の議論のひとつの着地点は、*cuteness* は「とりわけ赤子っぽい特徴の中でも、大人のうちに養育的ふるまいを引き起こすような視覚的特徴」に存する、ということになると思われる。単に赤子っぽい特徴というだけでなく、大人を子育てへと駆り立てる特徴が重要だ、というわけだ。

まずここで気づくのは、ここで語られている *cuteness* という質は日本語で言われる「かわいい」とはいくぶん違う質である、という点だろう。と

いうのも、日本語の「かわいい」という語はもっと多様な使われ方をされているからだ。「何歳になっても子どもはかわいい」というとき、私たちは単に視覚的特徴だけを考えているわけではない。また、何よりこのアプローチでは「自分の子供のほうがかわいいように見える」という親ばか現象を説明できない。他の子と比べて自分の子を取りわけかわいいと思う気持ちは、他の子と外面的・視覚的特徴だけを比べて出てくるものではないからだ。こうした点に鑑みると、この論争で語られている *cuteness* の適用範囲は、日本語の「かわいい」「愛らしい」と比べるとかなり視覚領域に偏ったものだと言わざるをえない。よって彼らの議論は、子育てに含まれる感情の一側面は捉えているかもしれないが、それだけで子育ての感情を全面的に説明することはできない。

B. この論争では、*cuteness* への反応は進化論的に組み込まれたもので、自動的に出てくる反応だと説明されている。しかしこのやり方で *cuteness* の文化的変遷を説明できるかどうかは疑わしい。私たちの生物学的構造はここ数世紀の間で大した変化はないはずだが、服やメイクで *cute* だとされるものの外見はこの数十年の間でも大きく変わっている。もし仮に、「私たちははだいに *cute* への本質へとどんどん近づいていっている」という立場をとるのであれば、ファッションのこうした短期的な変化も説明できないわけではないが、とはいえそのアプローチでは、流行の揺り戻し（リバイバル）現象を説明しづらくなってしまふ。先述の A の論点もあわせてコメントをまとめると、子育ての *cuteness* だけでなく現代文化の *cuteness* についても、視覚的特徴を生物学的・進化論的観点からとらえるだけでは説明が不十分になってしまう、ということになるだろう。

C. この論争では、モリオールの芸術的性質としての *cuteness* についての主張 (*cuteness* は芸術評価において重要な美的質にはなりえない) については、特に議論されていない。しかし、上のコメント A, B をふまえると、ここにも反論の余地がありそうだ。まず、*cuteness* を生物学的・進化論的に自動で出てくる反応とする見方自体が偏狭なものかもしれない。さらに、生物学的・進化論的に自動で出てくる反応を利用しているからと言って、そこから偉大な作品が生まれないわけでもないだろう（さらにいえば、伝統的な美の表現においても生

物学的な自動反応を利用している可能性はある)。そして、そうした自動反応をより巧みに利用した作品がありえないわけではない。実際『となりのトトロ』や『よつばと』のような作品は、子どものかわいさを描くという点では偉大な芸術的成功を収めている。Cuteness を表現の軸に据えた作品であっても、傑作はありうるのだ。

注

1. その成果はいくつかの形で公開されている^{[4][5]}。
2. モリオールの最初の論文については馬場朗が『美学』の論文紹介欄にて手短かに紹介している^[6]。
3. 『自然界と人間の運命』^[7], 307-8 頁。

文献

- [1] Morreall, John. Cuteness. *British Journal of Aesthetics*, 1991, 31(1), p.39-47.
- [2] Sanders, John. On 'cuteness'. *British Journal of Aesthetics*, 1992, 32(2), p.162-165.
- [3] Morreall, John. The contingency of cuteness: a reply

to Sanders. *British Journal of Aesthetics*, 1993, 33(3), p.283-285.

[4] 森功次. 子育てと美学. 美学会編. 美学の辞典. 丸善出版, 2020 年, p.590-591.

[5] 森功次. なぜ子どもは「できないことばかり」なのにかわいく見えるのか? 「子育ての美学」という試み. 現代ビジネス.

<https://gendai.media/articles/-/130243>, (accessed 2024-11-15).

[6] 馬場朗. ジョン・モリオール「愛らしさ」. 美学. 1992, 43(1), p.74.

[7] コンラート・ローレンツ. 自然界と人間の運命. 再装版. 谷口茂訳. 新思索社, 2005 年.

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費(N2315)「現代美的価値論における「美的問題と規範問題」という問題設定を問い直す」の助成を受けたものです。

(受付日: 2024年11月15日, 受理日: 2024年12月4日)



森 功次 (もり のりひで)

現職: 大妻女子大学 国際センター 准教授

プロフィール:

東京大学大学院 人文社会系研究科 博士課程単位取得満期退学. 博士 (文学).

専門は美学・芸術哲学. 現在の研究課題は「美的達成を反快楽主義の立場から再検討する: 非エキスパートの教育という観点から」(科研費, 基盤C).

主な著作・論文に、『世界最先端の研究が教える すごい哲学』(総合法令出版, 共編著), 「美的なものなぜ美的に良いのか: 美的価値をめぐる快楽主義とその敵」(『現代思想』2021年1月, 特集: 現代思想の総展望), 「芸術作品のカテゴリーと作者性: 「なぜ会田誠の絵をVOCA展に出してはいけないのか」」(『人間生活文化研究』30, 2020), 『ワードマップ現代現象学』(新曜社, 2017年, 共著), 「芸術的価値とは何か, そしてそれは必要なのか」(『現代思想』2017年12月, 総特集: 分析哲学), 「芸術は道徳に寄与するのか——中期サルトルにおける芸術論と道徳論との関係」(『サルトル読本』法政大学出版局, 2015年所収). 主な訳書にロバート・ステッカー『分析美学入門』(勁草書房, 2013年), ケンダル・ウォルトン「フィクションを怖がる」(西村清和編『分析美学基本論文集』, 勁草書房, 2015年所収), ケンダル・ウォルトン「芸術のカテゴリー」(電子出版物, 2015年), ノエル・キャロル『批評について: 芸術批評の哲学』(勁草書房, 2017年), ドミニク・ロペス, ベンス・ナナイ, ニック・リグル『なぜ美を気にかけるのか: 感性的生活からの哲学入門』(勁草書房, 2023年).